

□ 各地の音楽活動 ● 北海道

八木幸三

札幌交響楽団は、首席指揮者マックス・ボンマーと名誉指揮者ラドミル・エリシュカという西・東欧の名匠が、それぞれの持ち味による演目で熱演。御大2人のエネルギッシュなタクトは、今年も頗る快調だった。ボンマーは、2月定期でヨハンとリチャルト、2人のシュトラウス作品でドイツ人らしい厳格なリズム感による高貴で落ち着いた演奏を聴かせ、5月定期ではドビュッシーとマーラー、9月定期ではレーガーとモーツァルトを取り上げた。特にドイツ伝統の技法により近代音楽の一端を築いたレーガー作品をボンマーは、大きなスケールで快演した。一方エリシュカは、得意のチェコ作品に加え、3月定期と10月定期でチャイコフスキーの交響曲第4番と第5番を演奏し、一昨年の第6番に続く3大交響曲シリーズを完結させた。名誉音楽監督となった尾高忠明は、7月定期で実兄、尾高惇忠の新作「ピアノ協奏曲」を清水和音と協演。ピアノと管弦楽の関係を協調、対話そして対峙と様々な視点で展開させた。次年度から友情客演指揮者となる広上淳一は、6月定期で盟友ボリス・ベルキンとシベリウスのヴァイオリン協奏曲で息のあった演奏を聴かせた。海外客演指揮者では、マティアス・バーメルトがラヴェル編曲「展覧会の絵」で憂鬱な情景を骨太に描写、ドミトリー・キタエンコはラフマニノフの交響曲第2番など、ロシア作品をたっぷり聴かせ、ハンス・グラーフは生誕百年を迎えたデュティユーの交響曲第2番をダイナミックにドライブさせた。海外演奏家では、メンデルスゾーンの協奏曲でイザベル・ファウストのヴァイオリン独奏が深い小宇宙へと聴き手を誘う名演を聴かせた。

パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) は、昨年より第6代芸術監督となったワレリー・ゲルギエフが、PMFオーケストラ (PMFO) のCプロをドライブ。メンデルスゾーン／交響曲第4番「イタリア」とショスタコーヴィチ／交響曲第8番が演奏されたが、開催間際に加えられたレオニダス・カバコスを独奏に迎えてのプログラム／ヴァイオリン協奏曲が、これまでのPMFの中でもまれに見る名演となった。カバコスは、名器ストラディヴァリウスから放たれる洪く重厚な低音と繊細で耽美な高音、卓越した技巧で聴衆を圧倒。重苦しい主題ではじまるショスタコーヴィチの交響曲第8番は、ゲルギエフが本領を発揮。世相の不安を暗示するかのような終楽章まで、緊張感をゆるめず、作曲者の意図をオーケストラから見事に引き出していた。二人の巨匠からわき出るオーラは、PMFアカデミー生にも大きな影響を与えたはずだ。なお、ゲルギエフは2020年までの芸術監督継続を公表している。

前半のPMFOを牽引したのが、バーンスタインに師事し、オペラ指揮者としても活躍するジョン・アクセルロッド。Aプロでは勢いのあるマーラーの交響曲第4番を、Bプロではコンダクティング・アカデミー生の発表を兼ね、濃密な物語性を持つ3曲の管弦楽作品とブラームスの交響曲第4番が演奏された。アクセルロッドはゼスチャーを交えたわかりやすい指導でアカデミー生個々の特性を引き出していた。コンダクティング・アカデミー生の中で交響詩「はげ山の一夜」の原典版を指揮したA・プレイヤーは、自由奔放ながら明確な意志表示で作品に内在する土俗性を表出した。教授陣の演奏会では、近年PMFの顔と言っても良いライナー・キュッヒルをはじめ、ウィーン・フィル教授陣によるショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲第8番が、強烈な主張を聴き手に伝えた。近年、運営の合理化を進めるPMFだが、国際教育音楽祭としての性格を堅持しながら、

地元の聴衆を大切に作る姿勢は今年も十分に伝わった。札幌市内各所や地方都市での公演など、地域の人々がPMFと身近に接している姿が多く見られた。

オペラでは、北海道二期会とLCアルモーニカが12月にそれぞれ本格オペラを原語上演。前者は、「修道女アンジェリカ」と「カヴァレリア・ルスティカーナ」の2本立てをダブルキャストで二日公演した。白を基調とする共通のセットの中に神からの啓示を象徴しているかのような赤い紐が天井から床まで垂れ、練達した独唱、合唱が愛憎劇の中で真実の愛を見事に表現。後者は、格差社会、若者の貧困など今の世相を反映したかのような三浦安浩の鋭い演出が光った「ラ・ボエーム」。ブッチェーニの名旋律がハイレベルな演奏で聴けた。また、西島厚の演出、地元声楽家と合唱団による旭川オペラ劇場の「ラ・ボエーム」も注目された。

札幌出身のピアニスト遠藤郁子が「ショパン序破急」と題し、新能の写真家としても知られた亡夫、田中克巳への熱い想いを寄せノクターンとバラードを奏でた。地元ピアニストとしては、石田敏明、吉泉善太、新堀聡子、今年の道銀芸術文化奨励賞を受賞した中谷友美がペーター・ヴェン、シューマン、シューベルトといったドイツ系作品でそれぞれリサイタルを開催。彼らは室内楽でも多彩な活動を展開した。さらに若手ピアニスト鈴木飛鳥がN響ヴァイオリニスト青木調とのデュオリサイタルやベテラン岡本孝慈が没後百年のレーガー作品にじっくりと取り組んだコンサートも充実したステージだった。

声楽では、札幌室内歌劇場を精力的に牽引する則竹正人が、「リダークライス」などオールシューマンで、駒ヶ嶺ゆかりの「魂心の人」シリーズでは、ギターの宮下祥子を伴いシベリウス、ノルドグレン作品などで熟達したソプラノを披露。小樽で幼少期を共に過ごした東京室内歌劇場の針生美智子と中田喜直記念コンクール大賞受賞者、一織久美子が洒脱なトークを交えた楽しい二重唱を聴かせ、傘寿を迎えた田中則子が、円熟した歌声で岩見沢出身の作曲家猪本隆などの日本歌曲をたっぷり聴かせた。

バロック音楽をレパートリーとするムジカ・アンティカ・サッポロは、4月と10月の2回に分けJ・S・バッハの「管弦楽組曲」全曲を物部憲一（札幌ヴィオラ奏者）の指揮で、世俗的で躍動感あるバッハとして佳演。旭川出身のヴァイオリニスト藤川真弓は、子息オリヴァー・マークソンのピアノを伴い、グリーグやR・シュトラウスなどのソナタで5年ぶりの札幌公演をおこない、日本カスターネット協会会長を務める真貝裕司は、道内在住者を含む5人の邦人作曲家委嘱作品などでカスターネットの魅力を伝えた。元日本フィル首席フルーティスト阿部博光は、ピアニスト阿部佳子を伴い、32年前の初リサイタルの曲目を含め、これまでの活動を原点から見直したステージを展開。道内を中心に活躍する中堅フルーティスト立花雅和も色にまつわる曲を配したお洒落な曲目でリサイタルを開催した。フルート特殊奏法の第1人多久潤一郎と札幌在住のフルーティスト5人で編成されたフルートレトリューションは、「さっぽろアートステージ」のワークショップとリサイタルで、メンバーの作・編曲による楽しいステージを届けた。新進演奏家育成プロジェクトリサイタル・シリーズSAPPOROは、札幌ヴィオラ副首席奏者の青木晃一がヒンデミットの無伴奏ソナタなどを高度な技巧で奏で、楽器の魅力を十分に伝えた。

昨年開館した六花亭ふきのとうホールは、室内楽専用ホールとして「レジデンスアンサンブル」公演など質の高い演奏を多彩な企画で提供した。その中でも札幌出身の松本瑠衣子（チェロ）などで編成された「カルテット・ベルリン・トウキョウ」は、2月、6月にシューマンの弦楽四重奏曲など明朗で力強い演奏を聴かせた。また、同ホールはギターなどの響きにも最適で、ソプラノの阿部雅子と大型リユートであるティオルバを奏でるつのだたかしが初期バロック音楽を取り上げ、清澄な歌唱と共にティオルバの素朴で繊細な音色をホールに響かせた。